

目次 教えて先輩! ● 車窓から見た風景をきっかけに強みは「現場」と「県外」での経験
特集 ● 「古き良き魅力」の更なる可能性を追求!

～お子様が帰省された際に親子で将来を話し合ってみてください～

PRの舞台は「生産現場」

葡萄栽培の魅力を発見

私は学生時代、実家の葡萄園を継ごうと考えたことがなかったので、葡萄についての知識が全くありませんでした。しかし、卒業してから実家の作業を手伝った際、葡萄は色や形、味のバリエーションが豊富で、他の果樹に比べて手を加えたことに対する反応が早かったので、とても面白いと思いました。また、葡萄を買いに来るお客様の笑顔を見るとやりがいを感じ、次第に葡萄栽培の可能性や魅力に取りつかれていったため、この仕事に就く決心をしました。

地域活性化に携わる

ある時、果樹栽培のご指導をいただいた三条市の果樹園の方から、「三条商工会議所青年部で活動しないか」と勧められました。自宅は新潟市西蒲区ですが、人や地域を元気にする取り組みに興味があったので、行政区分にはこだわらずに入会しました。

平成21年には、青年部内に立ち上がった『ブランド創造委員会』の委員長に就任し、地域の魅力を伝える取り組みを企画する役目を担うことになりました。検討を重ねた結果、お客様には「生産現場」に足を運んでもらうことが大切だと考え、『三条まちあるき連絡協議会』を結成し、参加者が地域を散策しながら生産現場を見学・体験できるイベント※1を開催しました。

また、『燕三条プライドプロジェクト※2』のメンバーとしても活動し、食の生産現場を地域PRの要素として取り入れた『畑の朝カフェ』を開催しました。これは農園などを会

岡村葡萄園 岡村 直道 さん

プロフィール ● 新潟市西蒲区出身。都内の大学を卒業後Uターンし、実家の岡村葡萄園を継ぐ。また、燕三条地域を中心に、地域活性化を目的としたイベントの開催などにも携わる。

岡村葡萄園 URL: <http://www.7a.biglobe.ne.jp/~fukuzou/>



場にして、地元食材を活かした朝食を、燕市特産のカトラリーを使って召し上がっていただくイベントです。私の葡萄園でも開催したことがあり、朝食の提供の他、葡萄の収穫体験や直売を実施しました。

生産者と消費者をつなげたい

新潟県には沢山の魅力がありますが、それをうまく伝えきれていないように思いま

す。特に農家や伝統産業の職人は、作ることに限ってはスペシャリストですが、商品を発信する力はまだまだ弱いと感じます。こうした思いからも、生産現場をフィールドに、生産者と消費者をつなげるイベントを実施しています。生産者のファンになることでその地域に興味やわき、ひいては地域のファンになってくれると考えています。

さらには、沢山の粒からなり、皆で分け合える葡萄のように、人と人、人と地域がつながりを共有できる機会を今後も提供していきたいです。それが、葡萄栽培者の使命であると思っています。

※1:現在は「燕三条プライドプロジェクト」の一環として、「燕三条ものづくりの心に出会うまちあるき」の名称で実施。
※2:(財)燕三条地場産業振興センターに事務局を置く、燕三条の地域ブランドを確立するためのプロジェクト。



Uターン情報誌
「新潟生活」と「新潟Uターン情報」をセットで無料送付しています。

新潟生活

- 新潟にUターンした先輩の体験談
- 新潟の豊かな暮らしや魅力的な仕事の紹介など

新潟Uターン情報

- 新潟県内企業の紹介
- 就職活動の動向
- 就職ガイダンスのお知らせなど

送付をご希望の方は、ニイゲットでお申込み、又は新潟県県民生活課までお問い合わせください

新潟くらしのポータルサイト **niiGET** もご活用ください
ニイ ゲット <http://www.niiget.jp>

- **ニイガタビト**
週替わりで「新潟人」にフォーカスした特集を掲載しています
- **オススメ情報**
新潟のグルメイベントなどの口コミ情報を週5回お届けします
- **注目情報**
長期にわたって開催されるイベントや、参加募集についてお知らせします
- **新潟トピックス**
新潟県内の社会・経済情報を見ることができます

お申し込み・お問い合わせ
新潟県県民生活課
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
TEL025-280-5112(直通)

教えて先輩! vol.33

車窓から見た風景をきっかけに

東京での一人暮らし

私は、小さい頃から本が好きだったので、一人の時間を大切にしていました。一方で、都会暮らしに憧れもあったため、高校卒業後は東京の大学に進学し、人との出会いや情報に満ちた場所で充実した日々を過ごしました。

そんな大学時代、電車で揺られ帰省する道中、車窓から見る田園風景に穏やかな気分になり、幼かった頃を思い出しました。新潟に戻ろうと考えたきっかけは、田舎の風景を新鮮に、そして懐かしく感じたからだったように思います。



本を生業に

大学卒業後は、新潟市の食品メーカーに就職しました。やりがいのある仕事に打ち込む日々を過ごしていたのですが、自宅と会社を往

復する日々の中で、自分と違う働き方をしている人と交流したいという気持ちが芽生えました。そこで、新潟市で開催されている「朝活※」への参加や古本市への出店を通して、多くの人と出会い刺激を受けました。そして、イベントに関わるうちに本への関心が高まり、本を生業にすることを決心し、会社を退職しました。

その後、友人の紹介で、敬和学園大学が経営する「まちカフェ・りんく」内で古本コーナーを運営することになりました。現在は、古本を通じて新潟市の商店街を利用してくださる方と交流し、様々な刺激や感動を得る日々を送っています。

※仕事や趣味の新たな発見を得るための異業種交流イベント。出勤前や休日の午前中に開催されている。



伊藤 かおりさん (24歳)
『古本いと本』店主(古書商)

関川村出身。高校を卒業後、東京の大学で栄養士を目指し学ぶ。卒業後、新潟へUターン。新潟市の企業に約1年半勤めた後、古本屋を開業。

地域
新潟市

教えて先輩! vol.34

強みは「現場」と「県外」での経験

社会人一年目

私が卒業する頃は、大学生を中心に就職難だったのですが、幸いにも営業職として岩塚製菓に就職することができました。就職難の時代に地元企業に就職できた私は、恵まれていたと思います。

会社の方針で、営業職として採用された社員も1年間は製造部門に配属され、私も入社1年目は製造スタッフとして生地の製造作業を経験しました。製造ラインは24時間稼働させるため、スタッフは3つの班に分かれて8時間交替で勤務します。作業は、もち米を蒸米機で蒸かすところから始まり、蒸かしたもち米を練り機で練った後、副材料の大豆を入れて餅を製造。その餅を型枠に押し込んで冷やし、切断した後、焼き上げに適した量を乾燥させ、生地に仕上げます。

こうした経験を積んだことで、営業担当になってからは、他のメーカーの営業担当者より

詳細な知識を持つことができ、非常にプラスになりました。

営業として県外へ

1年間製造現場で働いた後は、神奈川県に赴任しました。その時から営業担当として、スーパーや小売店への商品説明を任せられました。取引先から厳しい条件を出されることもありましたが、自信を持って交渉していました。また、大学時代に関東で暮らした経験があったため、神奈川県では充実した時間を過ごせました。

神奈川県で7年間勤務した後、宮城で2年間、長野で7年間と、県外での仕事が続きまし



金子 祐三さん (42歳)
株式会社岩塚製菓勤務

妙高市(旧新井市)出身。都内の大学を卒業後、営業職として岩塚製菓に就職。一年間、製造部門で現場経験を積み、その後県外に赴任。営業として様々な地域を担当した後、3年前から長岡市にて勤務。

地域
長岡市

『古き良き魅力』の **地域活性化** 更なる可能性を追求!



伝統工芸 新潟県には、歴史ある特産品を守り続ける地域や、温かい結びつきが残る昔ながらの集落が多く存在します。また、全国の中でも伝統工芸が盛んで、職人技が絶えることなく受け継がれているのも特徴のひとつです。そこで今回は、伝統工芸技術に新たな特色を加える職人や、個性豊かな発想で地域活性化に取り組む人に焦点を当て、新潟の「古き良きもの」の更なる可能性を広げるためにチャレンジしている取り組みを紹介します。



※参考:「一般財団法人 伝統的工芸品産業振興協会 伝統工芸青山スクエア」HP

伝統工芸品目数(経済産業大臣指定)新潟県は全国第2位!

第1位: 京都府(17品目)

第2位: 新潟県(16品目)

第3位: 沖縄県(14品目)

変化してこそその伝統工芸

『Free From』立ち上げの経緯

着物の需要は、ライフスタイルの変化から昭和51年をピークに減り始め、同様に小千谷縮の需要も減少し始めました。次第に、このままでは生き残ることができないという危機感が生まれ、着物以外にも使用すべきだと考えるようになりました。

新しく展開するにあたっては、「技術」「人材」「設備」といった自身の保有する資源を洗い出し、「品質の維持」と「情報窓口の一元化」を徹底するようにしました。また、「世界に通用しないものは日本でも通用しない」と考え、イタリアで調査も実施しました。提案したデザインは酷評されましたが、素材としては非常に高い評価を得ることができたので、素材を活かせば売れるという感触を得ました。

そして検討の結果、デザイナーの名前を出さずに産地ブランドとしてオリジナルブランドを確立すること、そして、当時市場の成長が見込めた紳士服に進出することになりました。

オリジナルブランド名は、開放感があり、自

小千谷織物同業協同組合
観光振興チーム マネージャー 佐藤 恭子 さん
[小千谷縮]は古くから着物地として使用され、昭和30年に染織の国の重要無形文化財第1号として指定。昭和50年には「小千谷縮」とともに国の伝統的工芸品としても指定を受ける。その後、小千谷縮を洋服の生地としても活用するため、組合が主体となりオリジナルブランド『Free From(フリーフロム)』を立ち上げる。
小千谷織物同業協同組合 URL: <http://www.ojiya.or.jp/>



由な着方を楽しんでいただきたいとの思いを込めて『Free From』と名付けました。

『良さ』を知ってもらいたい

『Free From』は百貨店等で販売され、リピーターのお客様を中心に支持されていますが、より多くの方に『良さ』を知ってもらうための取り組みを行っています。

3年前からは、夏の間、小千谷縮の着物を着て街あるきを一日楽しむ『着付け体験』を実施し、多くの若い方からもご参加いただいています。体験したほぼ全員から「とても涼しかった」「病みつきになった」という声が聞かれ、また「色が豊富でカジュアルだった」といった感想もあり、実際に着ることで『良さ』を実感してもらっています。

他にも、今年2月に『浮世絵スクランブル』という、浮世絵・生け花・高校生の書・織物の4つがコラボレーションしたイベントを初めて開催するなど、地元のお店街や高校とも連



携しながら情報発信しています。

後継者の育成

当組合では、5年間かけて基礎を学ぶ職人育成講座も開いており、毎年、全国から受講生が集まっています。修了すれば即一人前という訳ではありませんが、受講生には我慢強く取り組んでもらっています。

近年は、『Free From』に可能性を感じて、後継者の若い人が戻って来てくれるようにはなりましたが、まだまだ若い人が増えて欲しいと思っています。

時代に合わせて変化してこそその伝統工芸だと考えているので、これからも産地の良さを伝えるために、あらゆる挑戦を続けたいと思います。

伝統工芸に若手の感性を融合

社会経験を経て職人の道へ

父は新潟漆器の職人ですが、仕事を継ぐように言われたことは一度もありませんでした。そのため、県内の専門学校を卒業した後は自分なりに進路を選択し、一般企業に就職しました。

その後、会社を退職したのですが、ちょうど同時期に、父のもとに塗り箸の注文が大量に入ったため、初めて漆塗りの作業を手伝うことになりました。当初は、手慣れをしながら次の就職先を探つもりでいたのですが、2ヶ月、3ヶ月と携わるうちに作業が面白くなり、自分が関わった商品がお客様の手に渡ることにも喜びを感じたため、漆器職人の仕事に就く決心をしました。父の仕事ぶりや商品を見て学び、5年経った頃から、ようやく自分の商品を販売できるようになりました。

独自のデザインに挑む

漆器には伝統的で決まったデザインが多いので、職人としての経験を重ねる中で、現代的な商品を作りたいという意欲が芽生えました。その思いから、伝統技術や漆本来の良さを活かしながらも、洋風の空間に合う商品作りを目

うるし工芸 井村 篤史 さん

プロフィール ●新潟市東区出身。企業での勤務を経て、「新潟漆器」の職人となる。若手職人として、現代的な高品質作りや実演販売などにも力を入れ、新潟漆器の魅力を広めている。



指しています。

現在私が手掛けるのは、3分の2程度は伝統的なデザインですが、残りは漆塗りのアクセサリや、若い世代の目をひくようなデザインです。ネックレスなどを購入した20~30代のお客様が、漆器にも興味を持ってくださった時は、とても嬉しいです。

お客様の反応をダイレクトに感じながら

今は、伝統工芸も職人自らが商品売りの時代なので、私も県外の百貨店で開催される職人展で実演販売を行っています。県外での販売活動は、新潟漆器を知らないお客様に、漆器や新潟自体をPRできる良い機会になっています。また、実演販売を通してリピーターになってくださる方もいるので、お客様と顔を合



わせて仕事ができることに魅力を感じます。職人になったばかりの頃は、とにかく商品を作ることが楽しかったのですが、今は、お客様の反応が分かる販売にもやりがいを持って取り組んでいます。

新潟県には沢山の伝統工芸品がありますが、地元の人々がその魅力を知らなければ、外に発信することもできないので、まずは県内の人にも新潟漆器の良さに気づいてもらえるよう働きかけたいです。また、「漆塗りに挑戦したい」と思う若者が増えれば、今後もこの産業を引き継いでいけるので、若い世代に漆器を知ってもらいたいと考えています。



「地域存続・活性化」の思いを形に

就職活動を止めて1ターン

母親の実家は、柏崎市にある小清水集落の神社の宮司だったため、小さい頃から集落にはよく遊びに来ていましたが、学生時代に訪れた際、住む人の数が減り、衰退している姿を肌で感じました。このままではいずれ集落がなくなってしまうのではないかと考えるようになり、「自分が何か行動し、集落を存続させたい」という思いが強くなりました。そして、東京での就職活動を止め、大学卒業と同時に柏崎へ1ターンしました。

集落内の交流を増やす

正直、1ターンしたまではよかったのですが、その後は何から始めればいいのか分かりませんでした。そこで、長岡市、十日町市など、県内の地域おこしの先進地を訪れ、キーパーソンからアドバイスをいただきながら、地域づくりのコツやノウハウを積み上げました。

実際、小清水集落では、集落の人達が交流するきっかけを作りたいと考え、秋の収穫が終わった頃に、みんなで音楽を演奏しながら、持ち寄った料理をいただくというイベントを企画しました。集落は若い人がいるだけで活気が

任意団体「コシミス」 矢島 衛 さん

プロフィール ●東京都出身。都内の大学を卒業後、母親の実家がある柏崎市に1ターン。一般の企業に勤務する傍ら、自身の住む集落を存続・活性化させるための活動を展開。平成24年4月には妻や有志の仲間らとともに、任意団体「コシミス」を立ち上げる。



出ますし、みんな喜び、応援してくれるので、とてもやりがいがあります。

強みは「人」が好きであること

1ターンして間もない頃は、私には何も強みがないと焦っていた時期もありました。しかし、ようやく最近になって、情熱を持って活動する人と話すことや、人とつながることが好きだということが私の強みだと気づきました。情熱を持ち活動する人の思いに積極的に耳を傾け、私も「コシミス」の活動や思いを話すことで信頼関係が生まれ、お互いを高めあうことができます。2年前には、そのようにしてつながった1人の友人と共に、彼の運営するスケート



ボードパークで大きなイベントを開催しました。彼をはじめ、私の活動や思いに共感してくれた多くの方々から協力いただき、一人では決して成し得ない大きな「楽しみ」を生み出すことができました。

「生業」としての地域づくり

首都圏と比べて、柏崎には楽しいことが少ないと思っていた時期もありましたが、今は少ないからこそ、楽しいと思えることを自ら作り出していけると思っています。東京には親が住んでいて、昔からの友人もいますが、それを除けば柏崎にこそ大切なものが沢山あると感じています。

いずれは、集落内でお店を開いたり、農業などの仕事に従事しながら、地域づくりを行いたいと考えています。そして、「コシミス」の活動の認知度が上がれば、他の集落とも連携しながら活動範囲を市内全域に広げていきたいと思っています。